医療ルネサンス No.5778 大腸がんの転移 4/5

複数の抗がん剤で完治も

さいたま市の主婦、鍋島環江さん(55)は2006年7月頃、おなかに違和感を感じた。市販の胃腸薬を飲んでみたが、効き目がない。子宮の病気を疑い、市のがん検診を受けてみると、意外にも大腸がんの便潜血検査が陽性と出た。

市内の総合病院で精密検査を受けると、大腸の一部の結腸にがんがあり、周囲にも転移していた。

その病院で治療を受けるつもりだったが、医師は「とりあえず手術しましょう」などと投げやりな態度で、手術の説明も不十分。この医師に命を預けられるか、不安になった。そんな時、当時パート勤務していた会社の上司が、がん研有明病院(東京都江東区)を勧めてくれ、転院した。

同病院で改めて検査を受けると、がんは大きくなり、腸閉塞を起こす寸前だった。膵臓(すいぞう)と大動脈のリンパ節、腹膜にも転移していた。余命宣告はなかったが、鍋島さんは半年もないように感じた。

ただ、主治医に「数年前なら治療法はなかったが、今は良い薬がある。頑張ろう」と励まされて、急に元気が湧いてきた。

8月、腸閉塞を防ぐために、結腸のがんだけ切除した。手術後、集中管理室の滞在時間を本来より短くして、展望が良い病室にすぐ戻してくれた。東京湾の花火大会を見られるのは、「今回が最後かもしれない」との医師の配慮だったと後で知った。

大腸がんが腹膜にも転移したが、抗がん剤治療がよく効いた鍋島さん。今も通院は欠かさず、再発の兆しは見られない(東京都江東区のがん研有明病院で)

9月から抗がん剤治療を開始した。鎖骨の皮下にポートと呼ばれる器具を埋め込み、静脈内に3種類の薬を持続的に注入する「フォルフォックス療法」だった。現在では大腸がんの最も代表的な化学療法になっているが、当時、国内で行っている病院は少なかった。

数日間入院し、後は通院治療となった。幸い副作用は手足のしびれぐらいだった。通院ごとに血液中の腫瘍マーカーの値が良くなり、通院が楽しみになった。でも治るとは全く思わず、毎日のように葬儀用の写真を自分で撮影していた。

がんは結局悪化することなく、09年3月、約2年半の抗がん剤治療が終わった。その後も再発はない。鍋島さんは、今は不要になった抗がん剤注入用のポートを一番の宝物として本棚に飾っている。

大腸がんは約10年前まで有効性が高い薬が少なく、治療が行き詰まることが多かった。しかし、05年、フォルフォックス療法が保険でできるようになり、大きく変化した。同病院の消化器内科・化学療法担当部長、水沼信之さんは「1割未満だが鍋島さんのような完全治癒例も増えている。簡単にあきらめないでほしい」と話している。